

令和 5 年 4 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00257

研究課題名(和文) 科学史叙述の新モデル構築に向けて 20世紀フランス思想における科学史研究の再検討

研究課題名(英文) Toward the Construction of a New Model for the Narratives in History of Science: A Reexamination of the Studies in History of Science in 20th Century French Thought

研究代表者

立木 康介 (TSUIKI, Kosuke)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：70314250

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：G・バシュラルからG・カンギレムを経てM・フーコーに至るフランスの科学思想史の系譜を精査するとともに、この系譜に連なる一連の科学史的業績をいわば叩き台にして、18-19世紀から現代に至る科学的知の歴史的な展開及び曲折を記述するにふさわしい新たな科学史叙述の可能性を探るという本研究の目的は、本研究単独の成果ではないものの、他の二つのプロジェクトとの密接な連携のもとで刊行された二冊の書籍(いずれも2021年刊)、すなわち、小泉義之・立木康介編『フーコー研究』(岩波書店)、及び、佐藤嘉幸・立木康介編『ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む』(水声社)に結実した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

科学史研究および科学史的叙述と、歴史性概念にかかわるフーコーの問題提起や思考の変遷のあいだの相互的な影響関係に着目しつつ、その現代的意義を問い直すと同時に、人間諸科学の切斷的歴史から、近代社会の権力装置、真理の編成過程へと考察を広げていったフーコーの研究を再構成することで、今日の科学史が知と真理の展開をいかに把握すべきかを考察した本研究は、一方では、現代フーコー研究における科学史のアプローチの重要性を際立たせ、その先端的実例を世に示すとともに、他方では、科学史的叙述が方法的に扱うべき史的場面の構造を重層的に取り出すことで、現代世界における科学的知の展開をより多角的に描き出すことに成功した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project, which is to examine the genealogy of the French studies in history of science from G. Bachelard through G. Canguilhem to M. Foucault, and to use the series of historical achievements in this genealogy as a springboard to explore the possibility of new narratives of history of science, suitable for describing the historical developments and turns of scientific knowledge from the 18th and 19th centuries to the present day, was realized, if not in a result of this project alone, but in two books published, both in 2021, through a close collaboration with two other projects: "Foucauldian Studies" edited by Yoshiyuki Koizumi and Kosuke Tsuiki (Iwanami Shoten), and "Reading Foucault's College de France Lectures" edited by Yoshiyuki Sato and Kosuke Tsuiki (Suiseisha).

研究分野：精神分析・思想史

キーワード：科学史 科学史叙述 ミシェル・フーコー 精神医学・精神分析 生物学・医学 数学・統計学 連続 / 不連続 人間学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ミシェル・フーコーが知と権力の本来的な不可分性を主題化して以来、「科学」という巨大な知の集積は、もはや非歴史的で客観的な「真理としての知識」のたんなる蓄積ではなく、諸領域で生産される知を真なる言説へと編成する過程で権力のネットワークを生み出し、それをより広く深く社会に浸透させてゆく歴史的な動態構造として捉えられるようになった。

科学的知の編成・展開と、「真理 / 誤謬」を決定するプロセスを通じて生成する権力に注目するこのような視座は、フーコーの師 G・カンギレムを介して G・バシュラールにまで遡る。フーコーはこれら先人たちの科学認識論研究(物理学、化学、生物学、医学を主たる対象とした)を受け継ぎ、20 世紀フランス哲学の中核的テーマのひとつとしてそれを深化させたのだった。その意味でフーコーをひとつの頂点とするこの思想的系譜に特徴的なのは、科学的認識の歴史を一連の「断絶」もしくは「不連続」の総体と捉える発想である。この「不連続の思考」は、フランスのみならず世界の科学史研究に方法的反省の契機を提供し、T・クーンによる「通約不可能性」の提起と並んで、従来の進歩史的・系統史的な科学史叙述にたいする批判を独自の理論的基盤から行った。

だが、とりわけフーコーにおいて顕著であるように、フランス的「不連続の思考」が諸科学の歴史のうちに見いだす不連続の位置や、それらの不連続を根拠づける認識論的枠組については、各方面から多くの異論が提出されており、それらの異論をもとにフーコーらの科学史的業績を広く検討し直すことが欠かせない。加えて、このフランス的文脈とは別に、現代の科学史(R・ポーター、C・オコナー、M・ジェイ、L・ダストン&P・ギャリソン、K・ヘンチェルら)は、やはりミクロな研究の積み重ねによって、単独で決定的な意味をもつ「不連続性」をむしろ否定する方向に進んできた。

こうした状況を踏まえて、20 世紀フランス科学史研究の所産にいまいちど向き合い、そのアップデートを試みるとともに、最近の知見を取り入れた科学史叙述の新たなモデル、新たな方法論を構築する必要のあることが認識された。

2. 研究の目的

「科学史叙述」という営みは、近代科学の成立と厳密に時を同じくして始まった。それは、近代科学を生み出した基本的な条件や要素を、それまでの人類史に当てはめ、その歴史的な系統を辿ろうとする関心のうちにこそ、科学史の起源が存するからである。

本研究は、近代科学に固有の構造と科学史叙述のあいだに見出されるこの密接なかかわりを軸に、科学的知の確立と発展の力動性を科学史叙述がいかに認識してきたのかを批判的に検討しつつ、現代世界における科学的知の展開を多角的に把握し、記述するにふさわしい科学史叙述の新たなモデルを構築することをめざす。そこには、科学の歴史叙述と科学自体のかかわりを調べることと並んで、歴史叙述としての科学史叙述の特異性を反省的に浮き彫りにすること(すなわち、科学史叙述の歴史学)も含まれる。

その際、二つのテーマティックが導線になる。1/ バシュラールに発しフーコーにひとつの頂点を見出す「不連続の思考」(科学史を一連の断絶もしくは不連続から成る構成体とみなす仮説)と、それに寄せられた諸反論の総体を、批判的かつ枚挙的に検証すること。2/ 「科学」による「技術」の「事後的な合理化」(カンギレム)を看過することなく、科学史叙述の複層性を構成する互いに異質な要素として両者の関係を構造化し直すこと。精神医学、医学・生物学、数学・統計学を主なフィールドとする研究者が参加する共同研究によって、これらの課題に取り組む。

3. 研究の方法

以上に述べられた課題に取り組むには、複数の領域を横断する研究グループの組織が不可欠である。精神医学、医学・生物学、数学・統計学の各分野の言説に通じ、その歴史を考察してきた本研究グループ構成員は、それらの作業に必要なスキル及び方法論を各自が備えているだけでなく、当該分野の歴史的動向とそれを可能にする社会・文化・政治・法律的諸条件の相関を見通す思想的視野を共有するとともに、従来の科学史研究で取り上げられてきた歴史的な諸発見や諸事象の位置づけを仏・独・英語の一次資料に遡って検証する能力と実績をもつ。そこで、本研究は以下の三つのサブ・グループ(班)を軸とし、同時進行的に、かつ定期的な会合を通じて横断的・包括的に、進められた。

精神医学研究班 本研究を統括するとともに、本研究班のイニシアティブも執る研究代表者・立木とともに、分担者・春木奈美子は、ルネッサンス以降の精神医学史と近代的「主体」の病理学的把握に的を絞り、『古典主義時代の狂気』から『精神医学権力』に至るフーコーの精神医学史研究の社会的・制度論的スキーム、及びそのなかでの精神分析の位置づけについて、総体的な再検証を行った。加えて、分担者・久保田は、代表者とともに、フーコーの扱いえなかった1980年代精神医学の生物学的・脳生理学的転回が精神医学史に刻んだ(と一般に指摘される)不連続とその現代的帰結を吟味した。

生物学・医学研究班 分担者・瀬戸口明久と田中祐理子は、生物学及び医学の近・現代における展開と曲折について、フーコーの科学史的研究の検討と、カンギレムの技術論及び規範性の哲学との関わりの解明を進めた。また、18世紀から19世紀の生物学的研究の進展と、その社会的・政治的な実践・要請としての医療制度、医学教育制度、社会的保健衛生制度の展開について研究を行った。

数学・統計学研究班 分担者・隠岐さや香と田中祐理子は、18世紀における数学及び数理科学の発展と同時代の啓蒙哲学思潮との相互的な影響関係を研究した。その上で、数理科学によって生じた哲学史上の重大な認識論的変転の実相を追究するとともに、これにもとづいて、フーコーによる考古学的科学史記述における「闕」概念の有効性を再検討した。また、数理科学と社会的・政治的な実践・要請の相関性を統計学、経済学の史的展開を通して検討し、これと統治論の関わりを追究した。

4. 研究成果

本研究は、当初から、京都大学人文科学研究所の共同研究「フーコー研究 人文科学の再批判と新展開」(班長・小泉義之)の一部に組み入れられつつ、同共同研究に同じく乗り入れた科研費プロジェクト(基盤C)「ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』総体の理論的・思想的的研究」(代表・佐藤嘉幸)と密接に連携してきた。その結果として、本研究の成果は、主として、前者の成果報告書である小泉義之・立木康介編『フーコー研究』(岩波書店)及び、後者との合同成果報告書である佐藤嘉幸・立木康介編『ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む』(水声社)の二冊(ともに2020年3月刊)に収められた。

精神医学研究班 から、代表者・立木は、両報告書所収の連続する論文「精神分析の考古学の行方」及び「パレーシアと精神分析」において、古典古代にまで遡って再構成された「セクシュアリティの歴史」の果てに、のちに「精神分析的主体」となる分裂した主体がアウグスティヌスの学説において誕生したこと、そしてフーコー晩年の「パレーシア」論はこの分裂した主体の歴史にたいする根底的なアンチテーゼであることを示した。一方、分担者・久保田は、『狂気の歴史』の再読を軸に、同書の枠組みに同時代的に捉えられる余地がなかった「自閉症スペクトラ

ム」の歴史を再構成するとともに（岩波報告書所収「狂気の歴史」と孤島 あるいは、フーコーによって書かれるはずもない「自閉症の歴史」について）、パレーシア論から遡及的に再構築されるフーコーの可能的な倒錯論を素描した（水声社報告書所収「倒錯者の不確かな肖像

最晩年講義から『狂気の歴史』を読み直す」。いずれも、フーコー的視座を経由して試みられる精神分析史・精神医学史の新たな叙述の実践であり、そのモデルの提示である。

生物学・医学研究班 から、分担者・田中は、水声社報告書所収の「フーコーとカントの人間学 「私たちの知の根拠へと向かわせる秘密の道」をめぐって」において、カントの『人間学』に発するとフーコーが指摘する二つの思想的「軌跡」を辿り、「知の根拠」という超越論的仮象を人間本性という自然のうちに回収してしまう「批判以前の水準」の思考にたいして、「知の根拠」の探求を自己自身の創出へと昇華させる「現代的 moderne」な思考を際立たせるとともに、フーコーにとっていかにピシャ的医学とサド的文芸が後者を代表する「互いを知らぬ双子」であったかのを明らかにした。だが、田中はそれに先立ち、2019年の単著『病む、生きる、身体の歴史 近代病理学の哲学』によって、生物学・医学研究班 のミッションそのもの（近現代の生物学及び医学の展開と曲折について、フーコーの科学史的研究を検討しつつ、カンギレムの技術論及び規範性の哲学との関わりを解明する）を達成したといえる。また、分担者・瀬戸口は、近代以降の科学コミュニティでかくも強大な強制力を発揮する「客観性」という規範がいかに19世紀に多面的に形成されてきたのかを詳述するL・ダストン&P・ギャリソンの浩瀚な著書『客観性』を翻訳することで、本研究班の取り組みを補強した。さらに、水声社報告書には、本研究の連携研究者E・ドリールが寄稿し、心理学者としてキャリアをスタートさせたフーコーが脳科学とのあいだにもちえた（かもしれない）いまだ解明されざる関係に注目しつつ、脳科学も含めた「精神の科学」の歴史叙述の可能性を模索した。

数学・統計学研究班 については、分担者・隠岐が、I・ハッキングや、自らが翻訳したD・ラブアンに依拠しつつ、フーコーの『知の考古学』を上述の「断絶説」から再検討し、フーコーの「考古学」が科学史や数学史とのあいだにもつ関係を明らかにすると同時に、この「考古学」を科学史的方法論と位置づけた場合に、そこに見いだされる限界（不徹底）と可能性を吟味した（「フーコーの「考古学」と科学史的記述 「断絶説」をめぐって」。ここでは、フーコー的「考古学」が数学の例外視において内的に破綻することが指摘される一方、フーコー自身の数学観を度外視して数学史を再検討すると、むしろ、17・18世紀に一貫したひとつの知的傾向を見いだすフーコー的考古学と反響し合う部分が見いだれることが示唆された。

なお、水声社報告書にドリールが参加したことで象徴的に印づけられた本研究とCAPHESの連携は、本研究の研究機関終了後も持続しており、さらなる成果の外国語での出版も視野に入っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 立木康介	4. 巻 1168
2. 論文標題 物の秘密 フロイトのリアリティ論からラカンの「現実界」へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 49-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立木康介	4. 巻 65-4
2. 論文標題 ラカンのいる風景 フランス精神分析史のなかのラブランシュ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神分析研究	6. 最初と最後の頁 357-368
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立木康介	4. 巻 1145
2. 論文標題 まなざし、鏡、窓 フーコーとラカンの『侍女たち』（前）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 90-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/3199104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立木康介	4. 巻 1148
2. 論文標題 まなざし、鏡、窓 フーコーとラカンの『侍女たち』（前）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 77-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/3199104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ダヴィッド・ラブアン / 隠岐さや香 (訳)	4. 巻 1145
2. 論文標題 数学という例外	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 75-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/3199104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 春木奈美子	4. 巻 17
2. 論文標題 夢・死・言語 負の遺産をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ジャック・ラカン研究	6. 最初と最後の頁 95-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuriko TANAKA	4. 巻 49
2. 論文標題 Perspectives of the Year 1945 and Turning Points in the History of Science	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ZINBUN	6. 最初と最後の頁 113-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中祐理子	4. 巻 57(288)
2. 論文標題 哲学者カンギレムについての科学史研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 科学史研究	6. 最初と最後の頁 285-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 立木康介
2. 発表標題 ラカンの二つの性別化理論と、その彼岸
3. 学会等名 学際的ワークショップ「知のリンクに向けて」第6回「男性性・女性性」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 立木康介
2. 発表標題 ラカン派のプラクシス
3. 学会等名 日本精神分析学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 立木康介、隠岐さや香、久保田泰孝、田中祐理子ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 読書人	5. 総ページ数 208
3. 書名 狂い咲く、フーコー 京都大学人文科学研究所 人文研アカデミー 『フーコー研究』出版記念シンポジウム全記録+（プラス）	

1. 著者名 ロレイン・ダストンほか著、瀬戸口明久ほか訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 448
3. 書名 客観性	

1. 著者名 小泉義之・立木康介編、久保田泰考、田中祐理子、隠岐さや香	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 590
3. 書名 フーコー研究	

1. 著者名 佐藤嘉幸・立木康介編、久保田泰考、田中祐理子、Emmanuel Delille	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 386
3. 書名 ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む	

1. 著者名 田中祐理子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 324
3. 書名 病む、生きる、身体の歴史 近代病理学の哲学	

1. 著者名 王寺賢太、立木康介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 読書人	5. 総ページ数 324
3. 書名 <68年5月>と私たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

フォーコー研究 人文科学の再批判と新展開・成果
<http://www.foucauldianstudies.jp/seika.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久保田 泰考 (Kukbota Yasutaka) (20378433)	滋賀大学・保健管理センター・教授 (14201)	
研究分担者	田中 祐理子 (Tanaka Yuriko) (30346051)	神戸大学・国際人間科学部・准教授 (14501)	
研究分担者	隠岐 さや香 (Oki Sayaka) (60536879)	東京大学・大学院教育学研究科・教授 (12601)	
研究分担者	春木 奈美子 (Haruki Namiko) (60726602)	京都精華大学・共通教育機構・研究員 (34317)	
研究分担者	瀬戸口 明久 (Setoguchi Akihisa) (90419672)	京都大学・人文科学研究所・准教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Seminaire international : Verite et fiction selon Michel Foucault	開催年 2020年～2020年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------